

皮膚科学を学ぶ若者たちへ

久保 亮治

学位審査の季節である。主査、副査、次々と審査依頼が舞い込んでくる。審査される側はもちろんたいへんだが、審査する側もたいへんである。落とそうと思って審査するわけではない。発表を聞いて不思議に思ったことを質問し、申請者の研究とキャリアの今後の発展を考えて、その一助になればという思いで質問をする。純粋にサイエンスの目で評価するのだが、心のどこかでは思わぬクリティカルヒットが入ってしまわないことを祈っている……。

私の父は皮膚科開業医であった。その昔、「学位は足の裏についた飯粒だ」とっていたのを覚えている。取っても食えないが取らないと気持ち悪い、のだそうである。もっとも、この表現には私の父特有の^{とうかい}韜晦が含まれていたように思う。私の場合はどうだったかという、とにかく好きな研究をやっていたらそれで満足していたので、学位はお腹一杯になるまで食べた後で気づいた「ほっぺについた飯粒」のようなものだったといえるかもしれない。これは食える。おかげさまで現職につけている。いまになってみればこれは、「とにかく好きな研究をやっていたらよい」という環境を整えてくださった先輩の先生方のさまざまな労力のおかげであったことがわかる。歳をとるとしみじみとありがたみがわかるものだ。多方面に心から感謝するとともに、その恩返しを後進の方々にしていきたいと思う。

学位審査をしていて感じるのは、研究をゼロから立ち上げた人の発表は強い、ということである。すでにあるルールに乗っかっただけの仕事とは試行錯誤の質と量が違うのだ。実験手法を考えて悩み、思わぬ結果の解釈に惑い、正しい答えを得る方法を探す。正しい答えが何か、という正解がわからない中で、答えに辿り着く方法を見出す訓練—いわば正しい問いを立てる訓練ともいうことができる—それこそが大学院で学ぶことである。悩み苦しんでは挑戦するセルフフィードバックを続けているうちに、知らぬ間に実力がついてくる。そこからさらに壁を突き破って研究が発展すると、飛躍的に実力が伸びる。ただし、ここで忘れてはいけないことがある。研究に費やす時間の多くは、上手いかわなくて悩み苦しむ時間である。たまに上手くいくと研究は前進するが、また次の壁が立ち塞がり、試行錯誤を繰り返す時間がやってくる。先輩や上司からの適切な研究指導とメンタルケアが欠かせない。皮膚科の将来を担う若者を育てることは、年長者の責務と感じている。

「自ら問いを立てて正解がわからない謎に挑む」力は、そのまま診断困難例や治療困難例の診療に直結する力である。教科書やガイドラインを学んで診療を行うだけでは身につかない力をつけて欲しいからこそ、学位取得を薦めるのだ。若者にはぜひ、大学院の門戸を叩いて欲しいと願う。